

講演「ホームレス支援活動を振り返って」

2024年6月10日

仙台夜まわりグループの青木です。

今日は、ですね、24年間のホームレス支援活動を通して、教えられたことや気づかされたことを、みなさんと共有することができたらと願っております。

さて、まず初めに、ですね、現在、日本全国にどれくらいの数のホームレスがいるのかをご紹介します。

厚生労働省では、2002年8月に公布されたホームレス自立支援法に基づいて、2003年から毎年1月に、日本全国でホームレスの数を調査しています。

今年の1月もですね、私たち委託を受けて調査を実施をしましたが、その結果が、4/26に公表されました。

それによると、今年1月の時点で、日本全国で2,820人のホームレスがいること確認されました。

今から21年前、2003年に行われた最初の概数調査では、全国で25,296人のホームレスが確認されました。ですから、この21年間で、2003年の25,296人から2024年の2,820人ですから、約1/10に減っています。

特に寄せ場、飯場と呼ばわれる地域がある東京、大阪、名古屋、神奈川の減少が顕著です。

その理由は、官民の様々な施策によるものと考えられてますが、ただし、仙台市に限っていうとですね、2003年に203人でしたが、2011年の東日本大震災後に100人前後を推移して、一昨年2022年が88人、昨年2023年84人、そして今年2024年は79人と、ここ数年横ばいが続いています。

ちなみに仙台市内で今年79人のホームレスが確認されたと申しましたが、仙台市内以外の宮城県内にはホームレスは1人だけという結果になっています。まずそんなことはあり得ない、もっと多くいらっしゃるはずなのですが、ま、いずれにせよ、

ただいま申し上げました通り、日本全国で、この20年間のホームレス数は2万5千人台から2千800人台と、約1/10、右肩下がりに激減しているのにも関わらず、こと仙台市内では203人から79人と、と1/3強くらいにしか減っていない。減り方が鈍いんです。

特に2011年の東日本大震災後の数年間はむしろ増加しましたし、その後、減ったり増えたりを繰り返して、この数年は横ばい状態。仙台市内でも、官・民それぞれが支援施策を実施しておりまして、毎年50人くらいのホームレスがお部屋に入ったり仕事を見つけて路上生活を脱却している、にも関わらず、数がほとんど変わらない、ということは、路上生活を脱却した50人と入れ替わるように、新たに毎年50人の方々が路上生活に陥ってしまっている、という計算になります。

さらに申し上げますなら、ホームレスの数をカウントするのに、たとえばネットカフェに長期滞在している人、車の中で生活している人たちは数に入れてはいけないことになっていますし、ファストフード店で夜を過ごしながら次の日の仕事を探す人、だとか、知人の部屋に居候している人などの数も入れられていない。

ここでぜひ覚えておいていただきたいことがありまして、イギリスをはじめ欧米諸国の公式な「ホームレス」の定義では、日本のように路上で寝泊まりしているという限定的な定義にとどまらず、あらゆる意味で不安定居住を強いられている人たちも「ホームレス」状態である、と定義づけられておりまして、

そのような意味で、先ほど仙台市内に直近で79人のホームレスがいると申しましたが、車上生活者、ネットカフェ長期滞在者、ファストフード店で夜を明かす方など、数に反映されないような、境界線上でギリギリのところまで途方に暮れている人たちたくさんおられまして、それらを含めると、ホームレス状態の人たち、仙台には、79人の1.5倍から2倍、すなわち120名~150人くらい、あるいはそれ以上の人たちが、今この時も、仙台で、明日どうなるかわからないという不安な毎日を過ごしている、まさに「ホームレス状態にある」ということになります。

そのような仙台の状況の中、私たち仙台夜まわりグループは活動をしているのですが、ここで、私たちの沿革を紹介させていただきたいと思います。

仙台夜まわりグループは2000年1月13日に活動を始めました。今から24年前ですが、おそらくここにいらっしゃる学生の皆さんの多くは、まだ生まれていない頃、かと思いますが、

今から20年前、仙台は、今に比べて格段に寒かったような覚えがあります。12月から3月の間に何度も大雪が降り、その度に雪かきに苦勞をしたことを思い出します。

そのような仙台市内に、当時少なくとも200人以上、路上生活を余儀なくされていた方々がいました。

榴岡公園内にテントを張ったりブルーシートで小屋掛けして寝泊まりをしていた方々、西公園内とその周辺、さらに仙台駅やその周辺、そしてイオン地下（当時はダイエー地下でしたが）、その他、勾当台公園ですとか、橋の欄干や橋の下とか、市内にある各公園の東屋などに、ですね。

そのような中、毎年冬期に、10名以上の方々が路上で亡くなっていました。そして死因の多くは、凍死であったり、栄養失調による衰弱死、いわゆる餓死であったりしました。

少なくとも私たちが住む仙台、宮城で、遠い世界の話ではなく、私達の足元で、誰にもみとられずに、毎年路上で死んでいかれる。なんとかそういう悲しい出来事起こらないようにしたい、ということで私と妻、そして同僚の、あわせて3人で、週に一回夜回りを始めました。

2000年1月13日でした。

最初は、使い切りカイロをもって、それこそ仙台市内中を巡回して声かけ続けたんですね。

体の具体はどうですか？何か困っていることはありませんか？

それから毎週一回、木曜日の夜8時くらいにスタートして、居場所を探しながら一人一人に声かけしますから、200人以上の人たちと出会うのには相当な時間がかかりまして、午後8時ごろにスタートして欲しい夜中まで、仙

台市内や郊外を巡回しました。

でも、最初は警戒して誰も私たちと話そうとはしてくれませんでした。これ後からわかることなのですが、彼らは、それまで様々な被害を受けていた。例えば酔っ払いに絡まれたり、蹴られたり、殴られたり、石を投げられたり、ひどい時には小便をかけられたり、そういう酷い目にあっていきますから、見知らぬ人に突然声をかけられたら警戒をするのは当たり前です。

「ホームレスは怖い」という根拠のないイメージを持たれがちですが、怖がっているのはむしろ彼らの方だったんですね。ですから危険を回避するため、身を守るために、なるべく単独行動でなく、複数でいるようにしますし、まとまって野宿をしようとします。

日中、公共の施設、図書館ですとか、市役所や区役所のロビーなどで過ごし、深夜になったらそれぞれの寝床に戻って来て、ほんの束の間の休息を取るとするのがルーテンです。

私たちが活動を始めた24年前、当時の仙台市長さんが、マスコミのインタビューで、仙台市内にはホームレスはいない。だから支援施策を講じるつもりはない、と答えておられたのですが、それでは私たちが毎週実際に出会っている200人を超える路上生活を余儀なくされている人たちは、「いない」ことになっているのかと、いたく憤慨した覚えがあります。

すなわち、存在しているにも関わらず、存在しないとされる、これは、「ホームレス」という側面が如実に表している、私たち社会の実相だと思わされます。

いるのにいないとされていく、社会で、問題を抱え苦しんでいる人たちが存在する、にも関わらず、問題はないこととされていく、これは、ホームレスに限らず、社会には、さまざまな歪みや問題があります。でも、それを認めずに、ないこととされていく、その結果、なんの処置も施されずに放置していく、という私たちの国や社会の現状がある、ということ、を、支援を通しての関わりが深まれば深まるほど、痛感させられてきたのですが、

先ほど申しましたように、24年前、夜まわりを最初に始めた頃、なかなか関係を作れなかったのですが、

毎週毎週会いに行き、声をかけうちに、相手が名前を名乗ってくれるようになり、身の上話しをしてくれるようになり、困り事や悩みを相談してれるようになって、そして、彼らの切なる要望に答えるような仕方で、背中を押

されるような形で、週一度の「夜まわり」から始まった活動が、広がりました。

通常の活動として、夜まわりの他、最終列車が出た後の深夜にホームレスの安否確認、深夜夜まわり、毎月第四土曜日のカレーの炊き出し。毎月第一土曜のセミナー・食事会。この活動は、食事会とリンクさせてセミナーを開催し、働く人の権利の話ですとか、最低賃金、公的扶助の利用の仕方、健康問題などの学習会を催しています。

また、当事者が主賓となってゆっくり過ごしてもらおうというコンセプトの大人食堂（毎週木曜日）、シャワーを浴びたり洗濯をする機会を提供したり（毎週月曜日）、就労意欲を失わないようにとのコンセプトで、清掃アルバイト機会提供（毎月第二、第三、第四土曜日）、相談センター「HELP みやぎ」の運営、その他、居宅確保支援、生活見守り支援、リユース事業、アルコールやギャンブル依存症の方々の回復プログラム実施、さらには、ネットカフェ長期滞在者や車上生活者の方々の調査や支援と、ほぼ毎日当事者と出会うような活動となって、現在に至っています。

活動の場面の写真を、後から時間があつたら見ていただけたらと思います。

ただですね、これら多岐にわたる活動というのは、何か私たちの側から、組織を拡大するために広げて来たではありませんで、出会った当事者たちから、これに困っている、これをしてほしい、という切なる要望があつて、なんとかそれに応えたい、そういうところで一つ一つスタートして、結果的にはほぼ毎日支援活動をするに至ったという経緯があります。モットーは、できるときに できる人が できることを。小さな働きでも、想いのある人が、小さくてもできることを持ち寄って、それらを紡ぎ合わせて活動を形作ってきました。)

さて、ホームレスの実像に迫ってみたいのですが、ホームレスに至る原因として、ただし、ホームレスといっても最初からホームレスだった人はいないんですね。

それまで地道に働いてきたけれども、リストラで突然仕事を失い、家賃を払えなくなって、ある人はそこからホームレスになっていく、またある人はなんとか仕事を探そうと粘り続けるのですが、今なかなか仕事ないですね、そこでサラ金、町

金に手を出して、家賃や生活費に充当する。多重債務を抱え込むようになる。利子すら払えなくなる。そうになると、もう転げ落ちるようにホームレスの状態に至ってしまう。まあそれぞれ、その原因は多様なのですが、多くの人たちは家族との関係が切れてしまっている。

支援する中で、この多重債務の清算ですね。これは事例が多いです。その多くが法定金利以上の利子を支払い続けていた人です。その場合、弁護士に間に入ってもらう整理してもらおう。あるいは、家族との関係の取り戻しのお手伝いもしています。

ホームレスというのはそのような意味で単に家がないという状態を言うのではなくて、社会的なつながり、家族との関係を失ってしまう、そのような状態をさしているのだと思います。

彼らの多くは真面目です。若い頃から一生懸命に仕事してきた人たちが多い。腕一本で現場の一番きつい仕事を担ってきて、年をとって、はい、さようなら、っていわれてしまう人たちが圧倒的です。中には厚生年金や国民年金の存在すら知らない人たちもいるんです。良く、マスコミがおもしろ、おかしく取り上げるホームレス特集番組などで、パターン化されて語られるように、あれは自己責任だ、自業自得だ、好きでやっているんだ、というような言われ方をするのですが、少なくとも仙台のホームレス、好きでやっている人たちはひとりもいません。できるならば仕事を探して自分できちんと生活したいと願っている人が圧倒的です。

私はむしろ、彼らの存在そのものが、私たちの社会の貧しさを表していると思う。どう言う貧しさか、それは、しくみを知らない奴が悪いから、学歴がないから仕方がないからと、知識のない者たち、立場の弱いものたちを利用し、使い捨てにして行く、そういう私たちの貧しさです。

悲しきかな、彼等の取り戻しの作業には時間と手間が係ります。社会に復帰して行くためのリハビリが必要です。

ちょっと想像してみてください。寒くて眠れないですし、下手をすると凍死しますから、体を動かして少しでも暖かくなろうと夜は町を徘徊する。食べ物も探さねばならないですからね。昼は図書館、公共施設で居眠りをする。

そう言う生活が染み付いていますから、朝起きて夜眠る、という基本的な生活の取り戻しというところからスタートしなければならない。食べることだ

けに奔走してきた彼らが、そう簡単には、じっくりこれからの人生を考えることなどできないのです。それはおそらく私たちだって、そうなってしまった時は同じなのであります。

さて、次に仙台市内のホームレスの特徴、移り変わりについてお話ししたいのですけれども、

活動を始めた当初、2000年の時点で、ですね、私たちの活動拠点の仙台には、先ほど申しましたように、200人を下らない路上生活者がいました。当時の、仙台市内のホームレスは、ほぼ全てと言っていいくらい、東北の出身、都会に出て働き詰めで、結局東北に帰ってきてホームレスになるという方々でした。

戦後から1970年年代にかけての高度経済成長期、金の卵と呼ばれて、東北各県から就職列車で東京や大阪などに出て行って、ずーっと働いて、人によっては年金も保険もかけてもらってなくて、年をとって働き口がなくなる。気がつくとも手元に何も残っておらず途方に暮れる。どうするのか、多くの人たちは、生まれ故郷の少しでも近くに來たいと考えて、東北に戻ってくる。

東京の上野駅や大宮駅から生まれ故郷の東北を思うということ良く聞きますが、それと同じように、路上生活ができる北限と言われている仙台から仙台駅から東北各地の故郷を思うのです。東北でなんとか食える、なんとか仕事が見つかりそうな仙台まで来て、そこで留まって、故郷に思いを巡らせる。

あるホームレスの方の言葉が今でも胸に焼き付いているのですが、こんなこと言っていました。その人は岩手県の郡部の出身で、若い頃から40年以上ずっと東京で鳶職の仕事をしてきた人でしたが、歳をとって仕事がなくなって生活ができない、年金も欠けていない、それで、仙台までやって来て仙台駅周辺で路上生活をしていた。私尋ねたんです。

「どうして仙台で路上生活をしているの」という私の問いに、このように答えました。「東京にはいたくない。でも今更、こんな体たらくのままいまさら故郷に帰れない、生まれ故郷に少しでも近い仙台で自分は死にたいんだ」。心打たれましてねえ。可哀想だ、可哀想を作り出している根源的原因は何か、深く考えさせられる言葉でもあったんです。

金の卵ともてはやし、出稼ぎの人たちの労働力を都合よく利用し、奪いつくし、吸い尽くして、歳を取ったら後は知らないよ、仕事がもうないから辞めてくれ、と簡単に切り捨てていく、そのような都会の論理と言いましょか、弱者切り捨ての社会の構造において、歴史の中で特に東北と言う地は、あの福島原発事故然りです、いっつも大都会の犠牲になってきた、今もそれは変わらないのかもしれない。東北に限らず、あの沖縄も然りです。日本の0.6%の面積しかない沖縄に、日本の70パーセント以上の米軍基地が集中しているというような、構造的な問題、様々な問題を、作り出しているこの国や私たち社会の現実がある、その矛盾の上に私自身の生活が成り立っている、それを、ホームレスとの出会いの中で、痛切に知らされてきた、言葉を変えるならば、いわゆる「路上」というのは、その時代時代の社会の状況が集約される場所と言いましょか、あらゆる社会の問題の坩堝、言葉を変えるならば、私たちの社会の現状を映し出す鏡である、そう思われています。

先ほど来申し上げてきました、私たちが活動を始めた約24年前、2000年代初頭は、東北から都会に働きに出て働いて働いて、年を重ねて、「もう年齢的に仕事は無理だ」と言われ解雇される。はたと気づくと、手元に何も残っておらず、社会保険や厚生年金もかけてもらっていないので年金も失業保険も貰えない。仕方がなく東北に戻って来るのだけれども、今さら生まれ故郷には戻れない、どんな顔をして実家の戻れるのか。そこで、仙台に行けば同じ東北だし、故郷に近いし、なんとかなるのではないかということで、仙台にやって来る。そのような、東北出身の50才代後半から60代前半の男性の割合が、仙台の路上生活者は高かったように思います。95%が男性でした。

ところが、2008年にリーマンショックがおきまして、時間がないので詳しくご説明しませんが、アメリカニューヨークに本社があったリーマン・ブラザーズという当時最大手の投資会社が破綻して600兆円以上の負債、それが日本にも波及したのですが、このリーマンショックの直後、仙台でも経済的問題を抱えた人たち、特に働き盛りの男性が、勤めていた会社が突然倒産しその結果路上に陥ったという方々増加しました。

私たちが支援した方の中で、大型トラックの運転手を長年してきた40歳代の男性がいらっしゃいました。月収70万円を下らない、本当に頑張って働いて来たのに、突然運送会社が立ち行かなくなって、マンションのローンが払えなくなって、結果家庭が崩壊し、全てを失って路上生活、強いられてしまっ

たということでした。これまで真面目に働いて家族を養っていたのに、どうしてこんなことになってしまったのか、どうしてよいのかわからないとご本人が頭を抱えていたのを覚えています。

そして、2011年3月の東日本大震です。震災直後、護岸工事や半壊したり全開したりした家屋の解体、福島原発事故後の除染など、復興関連の仕事を求めて全国各地から、働き盛りの人たちが東北に集中しました。

しかし、復興関連の仕事が一段落して、仕事と寮の部屋を失って、仙台で路上生活を余儀なくされたという方々が爆発的に増えました。

ホームレスの平均年齢も、東日本大震災前の56才から47才と、10才近く若くなりました。

そして、2020年からのコロナ禍です。2020年ごろから、新型コロナウイルス感染症が大流行して、特に、2020年の3月4月くらいから、働き盛りの若者たちから相談が殺到しました。

2020年当初は、とにかく飲食関係で働いていた若者たちからのSOSが多かったです。

仙台地元の老舗酒屋の二代目で大学を卒業して実家の家業を都合としていたのだけれど、コロナ禍で飲食店からの酒の注文が途絶えて家業が傾き、資金繰りが尽きて店じまいをすることになって借金を背負い路上生活を余儀なくした30才代の若者がいました。「やっと跡継ぎができて安泰だ」と喜んでいた父親も途方に暮れていたということでした。

あるいは、東京赤坂で、高級割烹料理店の板長だった人が、仕事が全くなくなって部下のために自ら職を辞し伝手を頼って仙台に来たもののどうしようも無くなったという方もいらっしゃいました。

コロナ禍の影響で生活困窮に陥る多くが、働き盛り、なのに、突然の失業、事業が立ち行かなくなったという仕方で行き詰まるという方々ばかりでした。

そう考えてみると、ですね、仕事を失う、生活に困窮する、路上に陥る、というのは、単に自己責任や自己都合で片付けられられないのでありまして、むしろ、社会情勢、その時代の社会を取り巻く状況や、国の政策、特に経済施策の問題、あるいは、自然災害、疫病等、外的な要因によって生活困窮

し、路上生活を余儀なくされてしまう、まさに、貧困が生み出されるという構造的現実があると思っています。

あるいは、皆さんも自分ごととして考えていただきたいのですけれども、人は、誰しも、人生の中で経験するであろう生活の難題課題、直面する、例えば、自分の病気、怪我、失業、離婚、家族の病気、親の介護などによって、家のローン、車のローンを払えない、生活ができない、そういうことあるのでしょうか。そういう危機に際し、私たちは、なんとか頑張ってそれを乗り越えようとしたり、家族や知人など周囲の支援によって問題を乗り切ろうとする、そしてなんとか乗り切ることができた、っていう、その連続が私たちの人生なのかもしれません。

でもそれら問題が、一度に複数訪れる。人生の危機が重なる、そういう状況に陥ってしまって、生活そのものが立ち行かなくなってしまう。

後ろ盾がなくなると、孤立無縁になって、踏ん張りきれず、どうしようもなり破綻し、住まいさえ失いそうになるということ、あるのでしょうか。ですから、ホームレスというのは、一部人たちの特別な課題でなく、誰しものが、そうなる危険に陥る可能性があるということです。

そのような時に、往々にして「自助」、「共助」だけが強調されることがよくあります。

自己責任なのだから自分でなんとかすべき（自助）ですとか、家族で、親戚で、仲間でお互いに助け合えばよい（共助）とかですね。しかし、自助、共助だけでは解決できないことがありますし、社会の状況がそのような問題を引き起こす場合もある。震災、コロナ禍のようなパンデミック、物価の高騰などでもありますし、そのような意味で、こういう時代だからこそ、「自助」、「共助」のみならず、「公助」が必要になって来ます。

すなわち、国や行政による支援施策であり、あらゆる意味でのセーフティネットの構築、ネットの網目をきめ細やかにして、いつ誰が、どのような危機的状況に陥ったとしても、何度でもやり直しができる社会の仕組みをさらに豊かにしていくこと大変重要なのだらうと思います。

困窮している人たち、悩んでいる人たちが、それでも今日一日生きていける社会、それは、一部の人、特殊な人だけの問題ではなく、実は、私が、そして皆さんが、今日一日を安心して生きていくことができる、何度でもやり直

しができる、本当の意味での豊かな社会作りにつながっていくのだろうと思います。

ここで、これからの時代を生きる若い皆さんに、ぜひ覚えておいていただきたいことがあります。

私いつもホームレスの人たちに呼びかけていることなのですが、それは、あなたには憲法 25 条で生存権が保障されている、ということです。

憲法 25 条。「すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する。」

そして、2 項「国は、すべての生活部面について、社会福祉、社会保障及び公衆衛生の向上及び増進に努めなければならない。」

全ての人には、健康で文化的な生活を送る権利がある、ということ、そして、国は、それを保障しなければならない義務があるということ。

しかも、それは、ただ食べて寝れば良いということのみならず、つまりただ生きていけば良いというのではなく、健康で、しかも文化的な生活を送る権利があるということ、そうでないとしたら、国は、皆さんにそのような生活を過ごすことのできる具体的な施策を講じる義務があるということ、ぜひ、皆さん、これからの人生の中で、自分理解、他人理解をする上で大切な憲法の条文の一つとして覚えておいていただけたらと思います。

さて、時間も迫ってきましたので、これまでの支援活動の中で、私が気付かされ、教えられてきたことをいくつかお話しさせていただきます。

まず、これ先ほども申し上げたのですが、

「ホームレス」と「ハウスレス」は違うということ、深く考えさせられています。

「ホームレス」と「ハウスレス」

ある女性を紹介します。彼女は 60 才代で、おそらく精神疾患を患っていらっしゃるが、しかし、残念ながら病識がありません。自分が病気であるという認識がないのです。彼女は年金を受給していてアパートの部屋もある。家賃も払ってしまして、しかし、彼女は部屋に帰らない、というか、帰れないそうなのです。

彼女によると、某宗教団体からの電磁波攻撃が続いているということなのですが、部屋を調べてもそのような形跡はありません。彼女はそれで、毎日市内の公園や駅のベンチで過ごしていらっしゃる。

これまでホームレスというと、「家がない」「部屋がない」人たちと括られて来ました。

そのような方々への支援として、まず居所を確保して、そこからその先をゆっくりと考えていくこと、すなわち「ハウジングファースト」の重要性を感じるのですが、

その一方で、「部屋がある」人たちが置かれている課題というのも痛感しております、

先ほど「ホームレス」と「ハウスレス」は違うと申しあげましたけれども、「ホームレス」はハードとしての部屋や家がないということにとどまりません。

ハードとしての部屋や家がないのは「ハウスレス」です。

たとえハードとしての家や部屋があったとしても、さまざまな局面で関係性や自分の根拠を失って孤立してしまう、それが実は、「ホームレス」という言葉が持つ本来の意味、課題なのだろうと思うのです。

逆に言えば、たとえ家やお部屋があっても、家族と一緒に暮らしていたとしても、相互の関係性を失い、お互いに関心を持たず、一つ屋根の下に暮らしていても関係性を失ってそれぞれが孤立している、とするならば、それは「ホームレス」と言わざるを得ない。

実際にホームレスは、家がないにとどまらず、関係性の喪失、自分の立ち所の喪失と位置付けられるのだと思います。

そうだとしたら、「ホームレス」という言葉は、さまざまに問いかけを持って、私自身のあり方、私たちの関係性そのものを問い直しているのだろうと思います。

現在、私たちが生きているこの社会、コロナ禍の後遺症でしょうか、物価高も相まって、皆が生活に汲々としています。他人のことどころではない、自分のことで精一杯という思いに支配され、その結果、相互の関係性を失い、他人に興味を示さず、一人一人が分断され、孤立していくという傾向にあります。

生活苦や心身の疲れ、将来の不安で、心がキリキリしていく、まるで自分以外の皆が敵であるかのように思い込んでしまう、そのような悪循環があるのでしょうか。

でもですね、そのような時代だからこそですね、人が本当に人として、自分を謳歌して生きることができるように、私が私として生きるように、そして、私だけではなく、あの人もこの人も、一人一人かけがえのない人間であることを取り戻していけるような関係、世界を作っていくこと、それは、言葉変えるなら、私自身が人であることを取り戻し、他者を大切な人として確認していくことが求められている、お互いの共感力と言って良いのか、想像力と言って良いのか、共鳴をしていく、心の持ちよう、かもしれない、と思わされています。

そのことを、支援活動の中、当事者たちから、教えられ、思い知らされた出来事、エピソードがありまして、最後にご紹介して終わりたいと思うのですが、

今年の1月1日に、石川県で大変な地震が起きて、特に能登半島で多くの方々がお亡くなりになり、今なお不便な生活を強いられている方々が大勢おられます。

私は、13年前あの東日本大震災の被災者の一人として、当時、仙台夜まわりグループの一員として、途方に暮れながら涙しながら被災者支援の炊き出しを行ったことを昨日のように思い起こすのですが、現在の能登半島の人たちの窮状を想像すると、胸が締め付けられるような思いになります。

そんな中、今年の2月3日に、ホームレス支援活動のセミナーの際に、参加してくれた仙台市内のホームレスを対象としたアンケート調査をしたんです。

そのアンケートの設問の一つで、「能登半島の被災者に何を思いますか？うご自由にお書きください」という問いに記入してもらったんです。

仙台市内のホームレスたちがいろんな答えを書いてくれました。

たとえば、「心からお見舞い申し上げます」。「一日も早い復興を願っています」。「光は必ずある」。「頑張れ石川、がんばれ能登」
そのように、それぞれ熱い思いと心のこもったメッセージを書いてくれました。

その中で、一人、非常に印象深い回答をしてくれた方がいました。
こういうことを書いてくれたホームレスがいたんです。

ちょっと読み上げますね。

「2011年の東日本大震災で、自分も被災した。家も仕事も、家族も失った。その時は、途方に暮れて、苦しくて苦しくてたまらなかった。そんな時、しきりに、頑張れ、頑張れ、頑張ろうと励まされた。頑張ろう宮城、頑張ろう東北、ステッカー、その人はこのように書いているんです。

もうこれ以上何を頑張ったら良いのかわからない、失ったものの大きさに押しつぶされそうで、頑張れって言われたって何を頑張ったら良いのかわからなくて自分にとっては逆に辛くて重荷で、悲しかった。

あの時自分はそうだったから、今、自分は、能登の人たちに、頑張れ、という言葉はかけられない。

もし、能登の人たちに言葉をかけるとしたら、

辛いよな、苦しいよな、悲しくて胸が痛いよな、希望なんかないと叫びたいくらいどうしていいか全然わかんないよな、でもこうして俺は、10年経ってもなんとか生きてるんだよ。

そう言葉かけしたい。」

この方は、自分自身が経験した震災の痛みを、このような共感の言葉として他者にかけていきたいと語っている、

これ大事なことだろうと思う。それは、たとえこの方のように、自分自身同じことを経験していないとしても、他者の痛みや窮地に、共鳴していく感性、そのレベルは違っていても、そこに思いを馳せていくことができる心、とても大事になってくるのだと思います。

ぜひ、皆さんの周りに生きている人、社会の人たち、世界の人たちに無関心ではなく、興味を持ってもらって、共鳴していただいて、今社会で何が起きているのだろう、世界はどう動いているのだろう、ということに関心を持っていただいて、それぞれの仕方で、人が人として生きること、に参加していただきたい、それは、ホームレス支援という個別のテーマだけという意味ではありません。

それぞれの皆さんが置かれている状況、それぞれが出会った課題やテーマにおいて、ぜひ、人間が人間として生きる、あるいは、それを阻害している根

本原因はどこにあるのか、を考察し、その解決に向けた方法を考えたり、話し合ったり、そこに身を置いて行ったりですね、そのようなお一人おひとりになっていただきたいと切に願うのであります。

ご清聴、ありがとうございました。